おひさまこども食堂

月１回
水または土曜
開催

「カレー食べたら稲刈りするよぉ～」おひさまこども食堂から見える田んぼには、黄金色の稲穂が一面に実っていました。取材日のイベントは稲刈り。１０月中旬、秋晴れのいい天気。稲穂には、からまったわらのようなものが…「これなに？」「かやねずみの巣やでー」「?!」「日本一小さいねずみや。もう、大きなって引越ししたんかなぁ～」「なに、食べるんかな？」自然の中には思いもよらない、いろんな発見があり、親子はステキな秋の一日を過ごせたようです。













５歳児の保護者に参加したきっかけを尋ねました。初めて参加したイベントで泥んこ遊びや田植えを経験し、ここを通るたびに親子で大きくなっていくイネの様子を見ていたんです。それをきっかけに息子は苗を育てることに興味を持ち出し、家でもきゅうりを育てたがうまく実らなかった。「土が少なかったから？」「水が足らんかったな？」と振り返り食べ物へのもったいないや植物への関心が広まり、好奇心旺盛になってきましたと嬉しそうに話してくれました。

ずっと長く子育て支援に携わってきた代表者。活動をはじめた当時は、我が子がまだ３歳児だったそうです。我が子の成長を喜び、悩みながら代表者自身も年齢を重ね家庭の状況も変わってきました。



「誰もが年を重ねていくという事実を目の当たりにしていく中で、いろんな世代が気軽に集える地域の食堂にしていきたい」と代表者は熱い思いを語ってくれました。この日の午前は園の運動会。いっぱい体を動かして腹ペコになったようで、大人もこどもも、おかわりをしてもりもりと食べていました。







若いスタッフにおひさまこども食堂に関わる理由を尋ねると、「人があったかい」「笑顔を見るとやりがいがある」と教えてくれました。稲刈り後のイネを束ねる作業も慣れない手つきで暑い中、汗をにじませ、精を出していました。😊



あとがき

「幼い頃から、いろんな体験を重ねることを大切にしています。いろんな体験の中で専属の職員が少ないのは弱みかもしれません。」と代表者のコトバ。机上だけではわからないことも体験を繰り返すことで広がり深まり、こどもの心の中に”宝物“として蓄えられていくのでしょう。小規模の食堂だからこそ、その時々に都度、関わってくれる職員がたくさんいるんです。たくさんいるからこそ「ここへ来るといろんな人に出逢い、人を感じることができる」という参加者の言葉。弱みを強みに変えていくって大切なことだなと感じたおひさまこども食堂の取材でした。